

自然をめぐるエッセー 47

由井 浩

日本橋の春

スーパーコンピュータ研究会の事務所は、日本橋本町にあるテクノネット社（本研究会副理事長の瀬野武氏代表）の事務所の間借りしている。研究会の打ち合わせなどで事務所に行く度に、事務局の瀬野さん、八代さん達とお昼にいろいろな店に行ったり、打ち合わせの後で日本橋の街歩きをしたりするのを楽しみにしている。

日本橋の街の魅力は、江戸時代からの重厚な歴史・伝統と時代を先取りする精神・施策とが融合している点にある。その一つの例として、私は福德神社に注目している。この神社は7世紀には既にこの地にあったと言われる歴史ある神社でありながら近年はビルの屋上や谷間を転々としていたが、2014年10月に「コレド室町」「YUITO」などの大型商業施設の間の広い敷地内に再建された。この神社は街の防災機能も併せ持っていて、災害時には1800人を収容する地下シェルターがあり、非常用電源も備えているという。また、境内には多くの木々が植栽されて、いずれはここを鎮守の森にする計画が進められてきた。



福德神社（2015年10月撮影）

最近私は日本橋の街の文化の一面を継承しているある場所にも興味を持つこととなった。昨年10月に本研究会四季報45号のエッセーに漱石山房記念館について書いた時に漱石の晩年の作品「硝子戸の中」を読み返したところ、漱石が若い頃に日本橋にある伊勢本という寄席によく講釈を聞きに行ったということが書かれていた。研究会事務所が入っている日本橋永谷ビルの入り口の右手にある「お江戸日本橋亭」が伊勢本を継承する寄席かも知れないと思い、事務局の瀬野さんを通じて永谷ビルの社長さんにこのことについて問い合わせたところ、お江戸日本橋亭は伊勢本を継承した寄席ではないとのことだったが、この社長さんは日本の伝統文化に熱い心を寄せて相撲と寄席の支援に力を入れておられ、かつて日本橋でも栄えた寄席の文化を残して行きたいという志をお持ちだということがわかり嬉しく思った。



お江戸日本橋亭

今年の春、福德神社再建から3年半が経ち、境内の木々も少しずつ育ってきたので、梅、桃、桜、椿などの春の花が咲くのを順番に眺めることにした。

3月6日に訪れると、梅の花が咲いていて境内にある薬祖神社は紅白の梅で彩られていた。まだ木が若く、花の量感が今一つだったが、何年か経つとこの光景にもっと見応えが増すことだろう。

福德神社境内にある薬祖神社を彩る紅白の梅 →



福德神社の梅見を終えて研究会の事務所に向かうと、事務所の入っている日本橋永谷ビルの北側の通りで早咲きのおかめ桜の並木が道行く人に春到来を告げていた。

←おかめ桜の並木

次に3月27日に行った時には福德神社の境内では枝垂れ桜と桃の花がちょうど見頃だった。椿の木には小ぶりの赤い花が沢山咲き始めていた。

桃の花を見るのは久しぶりだったので、木に近寄ってじっくり眺めた。花の赤色と背景の新緑の色とがよく調和していた。



福德神社で咲く桃と枝垂れ桜

福德神社で花を眺めた後、神社の近くの大型商業施設の間の通りの上に設けられた春飾りを眺めてから事務所に行った。



←大型商業施設
の春飾り

事務所のメンバーで歓談した後で、日本橋の街の真中を通る中央通りの反対側に行った。三井本館と三越本店本館の重厚な建物に挟まれた江戸桜通り沿いの桜並木の満開の花が、午後の陽を浴びて輝いていた。



桜満開の
江戸桜通り→

4月5日にはお江戸日本橋亭の寄席に初めて入った。この日は若手男性講談師による講談会“はなぶさ会”の第77回が催された。元気のよい若手女性講談師も登場して、寄席の世界に新風が吹き始めているのを感じた。田辺凌鶴という講談師による江戸時代の初めに奥多摩から江戸市中に水を引いた玉川上水の工事にまつわる話は、比較的短期間で終わったので順調に進んだと思っていたこの工事が、想像以上に苦難の連続だったという話で、興味深く耳を傾けた。歴史の裏側にある人間のドラマを伝承するのに講談は結構有効だと感じる事ができて、有意義なひとときだった。

帰りに福德神社などの葉桜を眺めて日本橋の春を見納めた。